

琉球の方言 12巻 : 八重山・与那国島

法政大学沖縄文化研究所

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

241

(発行年 / Year)

1987-07-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012657>

はじめに

琉球方言は日本語の中にあつて本土方言とは異なる特徴をもっている言語である。その特異性を生み出した要因として、島嶼という地理的条件をあげることができる。すなわち南海の島嶼には本土におこつた時代ごとの言語の変動の影響がそのまま伝播していかなかつたために、本土における歴史的な言語変化の波からはずれてしまつた面をもっている。たとえば、本土では、はやくに失なわれたハ行P音や、室町末期に起つた活用語の連体形と終止形の同化作用という大変動や、係り結び法の消失など、これらは、中央語における歴史的な言語変化の現象としてあげることができるが、この現象は、本土のあらゆる方言をまき込んでいった。ところが琉球方言では本土のように中央語の歴史的な言語変化の波をかぶらずに、これらの古形をいまだにとどめ、あわせて多くの古語もよく保存して、その特異性をあらわしている。

古い相もさることながら、いま一つは、島嶼という条件によって、琉球方言の内部において新しい個別の言語変化が深化していったためにその特異性をさらに深めていっていることである。無気喉頭化音と有気非喉頭化音との対立、宮古方言のf, vの発生などがそれである。

このように古い相と新しい相をもつ琉球方言は、奄美、沖縄、宮古、八重山、与那国の諸方言の特徴を生み出し、これらはさらに小方言に分化し、島ごと、集落ごとの方言にまで細分されているのである。これらは、あたかも日本語の変化の可能な限りの方向性を示しているかのようでもある。このような小方言を生んだ琉球方言の諸変化は、本土方言では観察できない多くの言語現象の観察を可能にしてくれる。これらの現象を比較検討することによって、琉球方言の変化過程をあとづけることが可能であり、ひいては日本語の変化過程の全体像をえがくことも可能となるだろう。そのための現存する諸方言の資料を整えることが急がれる。

日本語の一分枝として存在している琉球方言は、いま、試練の時機に直面している。すなわち、交通機関の発達によって島嶼という条件は克服されつつあり、また、マスコミの発達によって琉球方言の特異性も失われつつある。これは、工業化・情報化社会における必然的な趨勢とはいへ、大いなる文化遺産の消失を意味するものであり、文化的に貴重な資料が失われることになる。

このような状況にあつて、法政大学沖縄文化研究所では、琉球方言の実態をできるだけ広範囲にわたつて収集し、少しでも多くの言語資料を後世に残していくことを責務の一つと考えるものである。

琉球方言の資料を収集するにあつて、次のような計画を立てた。

(1) 奄美諸島から与那国にいたる南島全域の言語実態を、地理的にも、言語的にも、できるだけ広範囲にわたつて記述する。

(2) 調査は、年に一地点に限定し、その地点の言語現象をできるだけ多く記述し、年々その成果を積み重ねていき、ある時期にこれらを集大成する。

(3) 調査では、臨地してその方言を簡略音声記号で表記収集し、できるだけ分析しない生の言語資料を得るようにする。

(4) 調査は、中本正智・内間直仁・野原三義・加治工真市・高橋俊三・多和田眞一郎・名嘉真

三成の所員・研究員および任意による参加者が適宜担当する。多くの方の参加を歓迎する。

(5) 一年ごとの調査結果をまとめる。

今回は地方研究員の高橋俊三氏が中心になって調査してきた与那国方言の語彙集（下）を刊行する。詳細をきわめる与那国方言の実態調査報告であり、琉球方言の研究にとって大きな遺産となるものである。本誌が広く利用されることによって琉球方言の研究がますます進展することを希望する。

昭和62年7月

法政大学沖縄文化研究所

所長 武者英二

これは与那国方言の単語をアルファベット順に並べた語彙集である。それにアイウエオ順に並べた共通語索引と、簡単な動詞の解説および活用一覧を付けた。

私どもはかつて、昭和56年、59年、60年と、3回にわたって与那国方言の調査を行ってきた。そして、その調査報告を『沖縄方言研究』第4号、第7号、第8号に、掲載した。今年9月に、それらから疑問点を洗い出し、あらたに調査項目をふやして、調査した。これは、その結果をまとめたものである。すなわち、過去4回の調査の総まとめのごときものである。

今回は過去に報告されている様々の文献からも未調査の単語を拾い出し、確認するという作業も行った。そして、その所在もページを附して明らかにした。もっと詳しく調べたい人の便宜を図ったつもりである。それによって、同じ事を何度も与那国の人々に質問し、煩わすということが僅かでも少なくなればと願ってのことである。

私どもの幼稚な調査に、快く御協力下さった多くの方々に、心から感謝申し上げます。

昭和62年7月

法政大学沖縄文化研究所地方研究員

高橋俊三